琉球大学学術リポジトリ

探索活動と乳幼児保育

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-09-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 嘉数, 朝子, 當山, りえ, 石橋, 由美, Kakazu, Tomoko, Toyama, Rie, Ishibashi, Yumi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1855

探索活動と乳幼児保育

嘉数朝子*　當山りえ**　石橋由美***

Exploration and care for young children

tomoko KAKAZU*　rie TOYAMA**　yumi ISHIBASHI***

要　約

本稿では、子どもの発達における乳幼児の探索活動の意味に関連する発達理論を、認知発達とコンピテンス、内発的動機づけの面から整理した。

次に全米幼児教育協会の探索活動を主軸にした乳児保育の構想を紹介した。乳幼児は、彼ら自身の経験や試行錯誤、反復、確認を通して学ぶ。大人は、安全で感情的に支持的な環境を保障することにより、この学びを導き、励ましていく。つまり、乳幼児では、学童期の子どものように示範したり教示したりするだけの代理的な経験では、学ぶことができない。それゆえに、3歳以下の子どもたちの発達に合った保育は、遊びや能動的な探索活動、運動を奨励する。すなわち自分自身で環境に働きかける直接経験を通してしか学べないのである。この保育カリキュラムは、一貫した日課の枠組みを提供することによって子どもに信頼と安心を与え、過度のストレスから子どもたちを守りながら、刺激的な幅広い経験を与える。そのとき子どもたちとその周りの人々との暖かい関係が、子どもたちの経験の質に最も影響するものとして、重視されている。

さらに探索活動をめぐる保育のあり方について日米を比較し、保育プログラムを支えている社会文化的基盤についても検討した。

本稿は下記のような構成からなる。

1．「子どもらしさ」と探索活動
2．乳幼児の探索活動に関連する発達理論
　①ピアジェの認知発達理論
　②コンピテンス
　③内発的動機づけ
3．探索活動を主軸においた乳児保育
　①全米幼児教育協会の乳児保育
　②今井和子の保育理論
4．まとめ

1．「子どもらしさ」と探索活動

前世紀や今世紀初頭にかけて、欧米での子どもについての考え方は、子どもとは「小さな大人」もしくは「大人を小さくしたもの」であった。つまり、それまでの発達心理学のなかでは、大人を発達的に完成に近づいた存在としてとらえ、それとの比較によって、子どもは未成熟、未発達であるので、そのような子どもの特性を解消し、大人のように考えたり、振る舞ったりすることができるようになること、大人に近づくことが「発達」であるという考えが根強くあった。こうした考えにたつと、子どもの探索活動は、未成熟なものの典型であり、大人の指導によって一日も早く卒業させなくてはならないものということになる。

しかし、最近になって、そうした発達の考え方のとらえ直しが行われるようになってきた。その中心は、"子どもらしさ(Childlikeness)"を再評価し、乳幼児の探索活動を子どもが主体的に世界を理解する活動とみなすものである。

ここでいう"子どもらしさ"とは、幼稚っぽさ(Childishness)とはまったく違う特性で、好奇心に満ち溢れ、調べたがり試したがり屋であり、どうしてかなと思ったら、すぐに動き出す活動性として特徴づけられる。そして、何かをやるとき、与えられたものを受け身にやるのとはちがって、自分の好奇心や主体性に基づいて活動するので、

*琉球大学教育学部　**沖縄キリスト教短期大学　***新見女子短期大学

そのことにのめり込み、没入し、没頭して取り組む。そうやって活動しながら、いろいろなことがわかっていく。それは頭でわかるのではなく、からだでわかる、実感するというわかり方である。

本稿では、子どもの発達における探索活動の意味について、まず発達理論の面から検討していく。次に探索活動を重視した乳児保育の実践を提示し、乳幼児の探索活動を援助する保育のあり方について検討する。

2．乳幼児の探索活動に関連する発達理論

①　ピアジェの認知発達理論

ピアジェは、思考は年齢とともに質的に変化すると考え、生後２年間を"感覚運動期"とよんでいる。この時期は、感覚と運動を通じて外界やものの性質を知っていく時期である。この時期の発達について概略してみよう。

新生児は、吸う、つかむ、泣く、声を出す等のわずかな反射を持って生まれてくる。そして、このころの身体運動は無秩序で無目的で、外界に対する働きかけもランダムで組織化されていない。

ところが、生後２、３ケ月になると、特定のものをじっと見つめ、またそれを見て微笑するようになる。このころはメリーゴーランドや母親の顔は子どもの注意をひきつけるが、それらが子どもの視野から消えるとそのものは「存在しなくなった」と考える。つまり、ものの"永続性"という概念がまだ形成されていないのである。

４、５ケ月ごろになると、ガラガラなどに積極的に手をのばすということはないが、手に持たせると、しっかりと握りしめるようになる。

生後８ケ月から１年ぐらいすると、ものの"永続性"ということがわかってくる。今、見ていたものが隠されると捜そうとしたり、「いないいない、ばあ」の遊びをおもしろがるようになる。また、這い這いや歩行ができるようになると、子どもの環境への働きかけには大きな変化が見られるようになる。"子どもらしさ"の中核である好奇心によって、家中のものや場所を調べてまわったり、それまでに習得した技能を用いてものを探索するようになる。這い這いの時期には移動と探索は継時的に交替して起こるが、歩行ができるようになると、移動しながら探索することが可能になり、探索による情報量が多くなっていく。

このように、この時期の子どもは、ものへの運動的なかかわりから生ずる快の感覚を追求しながら、ものの物理的特性について学んでいく。

ピアジェにおいて、知能の発達における他の要因（成熟、経験、社会的相互作用による伝達）に加えて、最も大切な要因は均衡化であるとされる。障害が生じた時、主体は現実の変化に合わせて自らをうまく変えて再適応する。いいかえれば、自分の行動を調整することによって変化を補償する働きが均衡化である。それは、主体の側の認知的葛藤を解決する傾向であるともいえる。このようにして乳幼児の知能の発達は、主体の能動的な活動である探索活動において起こる。

②　コンピテンス

コンピテンスとは知能に対するアンチテーゼとしてホワイトら(1959)によって提唱された概念である。一般的には能力を意味する言葉であるが、「環境と効果的に相互作用する有機体の能力」とホワイトは定義している。人は自分がおかれた状況との主体的・能動的なかかわりを通して、自分がどれほど効果的かを確認したいという。自分についての有効性感情と、その感情体験を求めて能動的に努力を払う実行力とを含む概念を、ホワイトはコンピテンスと呼んだ。この有効性感情は、緊張を伴うストレスフルな場面では味わえない。ゆとりをもった遊びのある場面が必要である。特に子どもの場合は、能動的な探索活動が許される場面が有効性感情を育てることにつながる。

このような場面の例として、子どもの探索活動についてのピアジェの観察記録を紹介しよう。観察されたのは、生後３ケ月児の行動である。

「見たものを手でつかめるようになったあと、私はガラガラに結びつけた紐を右手にもたせ、その紐を十分つかめるように少し巻きつけてやる。しばらくのあいだ何も起こらない。しかし、最初に手が偶然動いてガラガラが揺れると、彼はこれをみてハッとし、あたかも手ごたえと効果を感じているかのように、右手だけで激しく引っぱってゆらす。そのあとたっぷり１５分は声をあげて笑いながらこの動作を続けた」(p.169)。

この乳児は、ガラガラをならすために紐を引き続けたのであるが、その行為に対して、外的な報

酬が与えられたわけではない。ガラガラと紐の関係が「わかる」とか、ガラガラを動かすことが「できる」といった、自分自身の能動的な行為の手ごたえ、有効性についての満足感が得られることによるものであろう。

③　内発的動機づけ理論

内発的動機づけ理論は、学習理論および外発的動機づけへの反証として提案されたが、探索活動の重要性を強調している（波多野・稲垣，1974）。

人間の行動の源泉を考える時に、2つの対立する立場がある。それは外発的動機づけと内発的動機づけである。前者は動因論に基づいている。この立場は、人間や動物を生来怠け者としてみており、非活動的であり、不快な緊張状態が生じた時だけ、それを低減しようとして行動を起こすと考える。すなわち、苦痛やホメオスタシス的欲求などである飢えとか渇き、性などのような一次的動因に基づいて学習された二次的動因によって「動機づけられている」とみなす。この考え方は今世紀中ごろ盛んであった学習理論における中心的概念であった。

ところが、いろいろな種の幼い動物は、外的動因がないときでも活発に探索活動を行うことが明らかになった。そこで内発的動機づけの考え方が提案されるようになってきた。これにはいくつかの証拠がある。ヘロン(1957)の感覚遮断の研究では、大学生を被験者として何もしないでも高給がもらえるというアルバイトを募集したが、視覚、聴覚、触覚が完全に遮断された特殊な部屋では、あまりの退屈さのためほとんどの者が2、3日しかがまんできなかった。ハーロウ(1950)は、外的報酬がないのにもかかわらず、サルがパズル解きに長時間熱中したことを報告している。これらのことから、人間が生きていく上では適度な刺激変化が必要であることがわかる。

情報を処理して行動する場合、それを動機づけるものは何かということについては理論的にはまだ分かっていないことが多い。しかし、どんな時に興味や関心が高まるかについては一致した研究結果が得られている。それが何であれ、強すぎも弱すぎもしない最適な程度の時であるといわれる。これは心理発達においてはきわめて重要な考え方である。幼児教育における内発的動機づけの大切さについてハント(1990)は次のように述べている。新奇なものに対する興味は、子どもが出会った新奇なものと見慣れたものとの間に、最適なズレがある時に生じる。新奇なものが子どもの認知できる能力をはるかに超えていたら、怒りや恐れを引き起こす。逆にズレが小さすぎると興味を失い、退屈する。ゆえに、子どもの能力と課題がどう対応するかという問題が教育においては重要になるとハントは述べている。これはピアジェの理論においては均衡化と呼ばれる概念と類似したものである。

3．探索活動を主軸においた乳児保育

探索活動を主軸においた乳児保育の例として、全米幼児教育協会(National Associ ation for the Education of Young Children; 以下NAEYCと略す）の保育構想と、日本の今井和子氏の保育実践を紹介する。

①NAEYC の乳児保育の構想

以下は、「誕生から3歳までの子どものための発達的に適切な保育(Developmentally Appropriate Care for children from birth to age 3)」の抄訳である(Bredekamp,S.,1986,pp.17-33.)。

NAEYC は、誕生から3歳までの子どもを、1.その発達的変化が他のどの時期よりもきわめて急速に起こる、2.認知的、社会的、情緒的、身体的領域のすべての発達が関連し合っている、3.欲求の充足をすべて大人に頼っている、4.不満やストレスに能動的に対処できないので、悲惨な境遇には特に傷つきやすい、と考え、発達理論に基づく乳児の発達に合った保育を提案している。

(1)　乳児の発達の特徴

1）最初の数ヶ月

この時期の乳児の発達のめやすが表1に示されている。

乳児の要求は瞬時のうちに変わる。乳児の発するそのような変化の合図をとらえて、大人は敏感に対応しなければならない。一貫した保育は重要だが、食事や睡眠などその子自身のリズムに合わせて保育計画は調整される。例えば、抱っこされて運ばれることによって乳児は感覚運動的経験を

することになるが、大人が抱いたりさわったりするのはその子どもの身体接触の好みによって決まる。これらの応答的な相互作用を通して乳児は、その子にとって注意を向けるに値する「好意的で、秩序のある世界(a benevolent, orderly world)」という感覚を発達させる。

新生児は、社会的接触が準備されている世界に入っていく。最初の9ヶ月間で、彼らは知らない人と友達を区別し始め、社会的相互作用を始める。彼らは声や動きで、喜び、驚き、怒り、失望、不安やその他の感情を伝える。子どもはどのように両親や他の人が彼らを扱うかによって、周りの人々の行動を予測できるようになる。子どもは応答的なアイコンタクトを頻繁にするようになる。子どもは言葉やその他の音を聞くのを喜び、身体接触を楽しむ大人に親密に抱きかかえられると、微笑みかけてくる。

これらの愛情深い大人との社会的相互作用を通して、乳児は最初のポジティブな愛の関係を発達させ始める。この信頼や安心感の発達は、新生児が肯定的な経験を期待するようになることから起こる。だからこそ大人は、子どもの苦痛の泣き声に即座に答えなければならないし、その子の個性的なテンポと感受性を尊重しなければならない。子どもに同調してくれる大人との応答的コミュニケーションは、その子どもの言語的・非言語的応答を励まし成長させる助けになる。

乳児にとっては、動き自体が乳児自身をより豊かにする。触れたり、触れられたりすることにより乳児の手、足、他の身体部が動くとき、その子は自分の身体の境界を知り始める。乳児は見るもの、聞くもの、感じるものを、自分自身の活動を通して変えることができるということを発見する。例えば、自分の足を振ってベルを打ち鳴らし音を聞くことがどんなに面白いかをすぐに発見する。

這うことができるようになる前は、乳児は、おもしろい出来事のほうに運んでもらったり（鏡の前に)、物を持ってきてもらったりなど、大人に頼っている。もし乳児がいろいろな感覚を味わい運動を経験する機会を奪われたならば、彼らの感情的発達や知的発達も妨げられるだろう。

暖かい応答的な大人から伝えられる幸福という感覚と安心感は、学習の基礎を作る。そこから乳児はさまざまな経験を得ることができる。乳児を保育する大人の腕の中に安心して抱かれていながら、乳児は自信をもってびっくり箱のハンドルを回したり、内部にきらきら輝いているものが詰まっているボールを転がしたり、他の興味をそそられるものを調べたりできる。この不思議な興味深い世界に対する感覚は、その子の将来の学習につながる。

表1

誕生から3才までの子どもたちの発達の目やす

＜はじめの数カ月(誕生～8カ月)＞

他者への興味	自己覚知
・新生児は、人の顔と人の声を好む。 生後2週間の間は彼らは、主要な養育者の姿や、におい、声がかり、それを好む。 ・社会的微笑と互いに見つめ合うことは、初期の社会的相互作用の証である。 乳児は、これらの相互作用を始めたり、終えたりできる。 ・抱き上げてもらったり、あるいは食べ物を与えられることを期待し、体を動かせてそれに参加する。 ・大人たちを、興味と新奇性のある対象として見る。遊ぶために大人を求める。抱かれるために、腕を伸ばす。	・側頭に指や手をしゃぶる。 ・自分の手を観察する。 ・物が顔の方へ飛んで来たとき、まるで自分を守るかのように手を上にあげる。 ・触られた体の部位を見る。 ・おもちゃに手を伸ばし、つかむ。 ・両手を合わせて握ったり、指で手に触ったりする。 ・物に変化を起こそうとする。 ・知らない人と友達を区別し始める。親しい人に抱かれたいという好みを示す。
運動の目安と目と手の協応のスキル	**ことばの発達／コミュニケーション**
・乳児は、多くの複雑な反射を働かす。 例えば、しゃぶるために何かを探す、落ちるときに体を支える、呼吸の障害や、光や、においや痛みを避けるために頭をまわす。 ・口に手や物をもっていく。 興味のある物の方へ手を伸ばし始める。 ・物をつかんで放して、再びつかんでそして再び放す。 ・頭を持ち上げる。頭を支える支えなしに座る。寝かえりをする。手を使って物を持ちかえたり、操作する。 はいはいする。	・言語や言語を合図して、泣く。 ・社会的接触を始めるために、笑いかけ、声を出したりする。 ・人の声に反応する。顔をじっと見つめる。 ・興味を表現したり、影響を及ぼしたりするために、声のコミュニケーションや声を使わないコミュニケーションを利用する。 ・すべてのタイプの音声を使って、喃語を話す。 一人のとき、自分一人で会話をする。 ・喃語を組み合わせる。 親しい人々の名前や慣れた物の名前を理解する。笑う、会話を聞く。
身体的、空間的、時間的な覚知	**目的のある行為と道具の使用**
・親指をしゃぶったり、おしゃぶりを探して、自己を安心させる。 ・ゆっくり動くものを目で追う。 ・おもちゃに手を伸ばし、つかむ。 ・落とされたおもちゃを探す。 ・異なる視点から、物を同定する。 毛布の中におもちゃが隠されているのを見て、そこに隠されたおもちゃを見つける。	・自分の手を観察する。 ・手とガラガラが両方とも視野内にあるとき、ガラガラをつかむ。 ・おもしろい光景や音を接続させるために、物を手でたたいたり、けったりする。 ・大人に再開させるために、身体をはずませてせがみ、再びひざに乗ろうとする。
感情の表現	
・不快と快/喜びをはっきりと表す。 ・他者たちよりも、第一の養育者に対して、より活発に喜んで応答する。 ・沈んでいるとき、親しい大人によっていつもは慰められる。 ・社会的刺激に対して、笑ったり、明らかな喜びを示す。 人々に非常に関心がある。社会的接触を失うと、不愉快さを示す。 ・大声で笑う、(大笑い) ・おもちゃを取られると、不愉快さ、あるいは、失望を示す。 ・いくつかの明らかに異なる情緒を表す：愉快さ、怒り、不安、怖れ、悲しみ、喜び、興奮、失望、満足 ・冷静に、あるい不安をもって、見知らぬ人に反応する。	

2）這い這いや歩き始めのころの子どもたち

この時期の発達のめやすが表2に示されている。

安全に動くことの自由は、這い這いしたり歩きだした乳児にとって重要なことである。乳児は、まだ大人からの思いやりや個人的な注意を必要としているけれども、自分のペースで動いてどこかへ行き、ふたたび大好きな大人のいる安全基地に戻ってくる。

子どもが話しだす前から、その子の感情や知識を大人がわかりやすく明確に説明してやると、その子の感情や知識が拡がる。例えば、「あなたがあの箱のなかにあのカップをいれたら、何が起こるかな？　それは大きすぎるかな？　小さすぎるかな？　ちょうどいいかしら？」と大人は言う。乳児が自分でもっと動けるようになると、安全基地は、身体的接触によるのと同じように、目や耳を使った間接的接触によっても確立・維持されるようになる。

慈愛に満ちた安全な環境の中で、有能であることや、社会的に適切なふるまいをすることが期待されるときに、この時期の活発な乳児は急激に成長する。

＜コンピテンス＞：乳児は自分の多様なスキルを完全なものにすることに熱中する。この時期の良質の乳児保育プログラムでは、遊んだり探索するためのたくさんの種類の教材からなる選択肢が子どもに与えられる。子どもは、自分の遊びに向かうとき、自分自身のコンピテンスを感じる。例えば子どもがよくする積み木構成で、乳児は自分自身を良きものと感じることができる。しかしながら依然として入浴やおしめ換えのような日課が、身体的発育や知覚能力、コミュニケーション能力を高めるための創造的な機会になる。

「選択の機会」という宝物が与えられることによって、乳児は自分のしたい活動や欲しい物を探すことを学び、苦痛や恐ろしい事態を避けることを学ぶ。乳児はまた実用的な感覚運動的仕方で周りの世界を理解し始める。それは原因と結果の関係や、道具の使い方、離れた所にある物と物との空間関係、パースペクティブについての知識である。乳児は同じ物を集め、比較し始める。乳児は模倣し、大人や他者たちとの関係を保つパターンを発展させる。その子らしさがますます増大しそれを表現するようになる時期なので、子どもが自ら多様な活動を経験し、物や人々を探索して学ぶよう誘う必要がある。

この時期の乳児は、その後も道具を使って操作したり（例えば、カップで水をくむ）、物の三次元を理解したり（例えば、箱の内側をよじ登る）、そして音や行為を発展・変化させたりし始める（例えば、ベルの音を鳴らしながら、汽車を前後に動かすなど）。

これらの新しいスキルは、乳児が腹這いや四つ這いで這ったり、動きまわったり、歩いたり、階段を登り安全に降りるときに生まれる。乳児が物をつかみ、落とし、引っ張り、押し、投げたり、入れ子を重ねたり、指で触ったり、口に物を入れたりするとき、その子の微細な筋肉のスキルは発達する。重要な大人の名前や物の名前、活動に関係する言葉など、乳児は最初の言葉を発達させる。乳児を刺激するものはたくさんあるのだが、感受性のある大人は、活発な活動と静的な活動の組合せや午睡など、一日の遊びの強さに良いバランスを持たせるよう配慮する。

＜社会的行為＞：この時期の活発な乳児は、他の子どもに対する強い好奇心を持っている。友情が現れ始めるが、乳児は互いに相互作用の経験をまだあまりしていないので、子どもたちが相互に関わるには大人の援助を必要とする。

子どもたちが、寛大で、忍耐強く、我慢強い大人を模倣するときには、短時間であれば、子ども同士で良い関係を作れる。しかしたいていは疲労や、不安、他の苦悩が子どもたちを圧倒する。大人は、子ども同士の社会的相互作用のこの大きな変動性を予測し、子どもたち自身で解決できるよう彼らを導く準備をしなければならない。

子どもがよく動くようになることから起きる1つの典型的な問題は、一人の子どもが他の子どものおもちゃ（あるいはおやつや特定の人といる時間）を欲しがるときに現れる激しい所有欲である。一般の予測に反して、子どもたちに共有を強いることは、共有することを子どもに学ばせるための有効な方法とはいえない。たっぷりのおもちゃが用意されるべきだ。もっと重要なのは、やさしい大人とおもちゃを共有することの方が子どもにはたやすいということだ。

また子どもたちは、所有権を交渉するための多くの試みを経験しなければならない。そうして子どもは、他の子どもたちのパースペクティブに対する感性を発達させることができる。共有物は彼らのところへ戻ってくるのだという確信を、彼らは持つ必要がある。なぜならば、視野から物がなくなっても、その物は存在しているということを、学び始めている時期だからだ。

表2

＜はいはいをする子どもたちと歩く子どもたち（8～18カ月）＞

他者への興味	自己覚知
・見知らぬ大人に不安な振る舞いを示す。 ・関係を確立するためのペースとして、誰かと一緒に物を楽しんで探索する。 ・子どもが喜ぶことをしてもらうために、他者を得る。（おもちゃのネジを巻く、本を投げ、人形を与える。） ・仲間にかなりの興味を）示す。 ・大人の言葉に熱心な注意を示す。	・自分の名前を知る。 ・鏡に映った自分に笑いかけたり、遊んだりする。 ・養育者から安全感が与えられているときは、自信を持って探索するために、大きな筋肉や小さな筋肉を使う。時々、養育者の存在を確かめる。 ・物に変化を起こすための機会をますます知るようになるが、自分の活動に対する責任についての意識は限られている。 ・自己主張を通して、強い自己を表す。他者たちの活動を指示する。例えば、「そこに座って」 ・自分の身体の一つの部分、あるいはそれ以上の部分を同定する。 ・「私を(me)」、「あなた(you)」、「わたしが(I)」を使い始める。
運動の目安と目と手の協応のスキル	**ことばの発達／コミュニケーション**
・いすに上手に座る。 ・自分で立ち上がり、家具につかまって立つ。 ・手をひいて導かれて歩く。一人で歩く。 ・物を投げる。 ・階段を上る。 ・紙にマーカーで書く。 ・かがむ。早足をする。2、3歩後ろ向きに歩くことができる。	・話せるより、もっと多くの言葉を理解する。20以上の物について、名前が言われると、その方を見る。 ・長い電語の文を作る。 ・ノーと頭を振る。2つあるいは3つのはっきりした言葉を言う。 ・興味をもって絵本を見、物を指さす。 ・援助を得るために、泣くこと以外に声の合図を他の人に使う。 ・「私を(me)」、「あなた(you)」、「わたしが(I)」を使い始める。
身体的、空間的、時間的な覚知	**目的のある行為と道具の使用**
・積み木構成をしようとする。 ・3つの箱の中の1つの箱の下におもちゃが隠されたのを見て、正しい箱の下にあるおもちゃを探し出す。 ・枕のような障害物の下におもちゃが隠されたときでも、望みのおもちゃを探し続ける。 ・ソファーの下に転がっていき、反対側に出ていったボールを追って、そのボールを手に入れるために目り道ができる。 ・足を靴に入れたり、袖に腕を通したりする。	・おもちゃのネジが切れたら、手でその活動を続けようとする。 ・おもちゃを手に入れるための道具として、棒を利用する。 ・オルゴールのネジが切れたら、そのネジを巻くためのカギを探す。 ・何かに手で触るために利用できるイスを持ってくる。 ・欲しくない物や人を追い払う。 ・手づかみで自分で食べる、(小さなフルーツのかけらや、クラッカー)。 ・何かを手に入れたり、うれしくない物を避けるために、這ったり、歩いたりする。 ・足を靴に入れ、袖に腕を通す。 ・指やスプーンで、部分的に自分で食べる。 ・少ししかこぼさないで、コップを上手にもって飲む。 ・自分で食べるために、スプーンを上手く使う。
感情の表現	
・親しい人に愛情を活発に示す：抱きつく、笑いかける、走っていく、もたれかかる、など ・第一の養育者からの分離で、不安を示す。 ・否定的感情を示す。 ・新しくできるようになったことに、誇りと喜びを示す。 ・両親に対して強い感情を示す。 ・マスターすることに喜びを示し続ける。 ・強い自己感を示して、自己を主張する。	

このような受容的な雰囲気においてのみ、乳児は、「共有する」という社会的能力の価値との互恵主義を理解し始める。大人は、子どもが喜んでそうするときにだけ、共有するという子どもの選択を尊重する。

3）歩き初めのころや2歳ころの子どもたち

この時期の子どもの発達のめやすが表3に示されている。

＜コンピテンス＞：1、2歳ころの子どもは、探索活動をし始め、創造力も成長する。創造的な遊びを促すような小道具が与えられたら、彼らは空想を楽しむ（例えばおもちゃの犬を生きているようにあつかったり、また1枚の布きれを毛布にみたてたり）。乳児のころの要求がふさわしいものであったなら、子どもたちは自ら選び、考え直したりという経験をすることになる。

子どもの創造力と好奇心は、大きなエネルギーと創造的な可能性を与える。これらの能力を発達させ表現するための機会が必要だ。子どもが激しい感情や急速な気分の変動を取り扱うときには、その手助けを大人に頼る。大人は、子どもが自分で理解できるような機会を多く提供できるよう配慮しなければならないが、子どもが求めるときには大人の援助も利用できるようにしておかなければならない。

子どもは物をカテゴリーに分類し始める（例えば行進させるためのゴム製の大きな動物と、動物園にいる小動物の区別）。芸術、音楽、ダンス、劇遊びに使われるあまり構造化されていない教材は、創造的に子どもたちが考え、問題を自分で解決する過程を楽しませてくれる。

子どもの精神的活動は新しい段階に入る。シンボルに慣れてくると、言葉もだんだんソフィスティケートされてくる。萌芽的ではあるが、やや抽象的な子どもの思考によって、大人の考えや、数、言語的シンボル、科学的シンボルが理解されてくる。そのためには、共通言語や社会的に共有された意味を子どもが使用する経験が必要である。

乳児の考えることは、より年長の子どもたちや大人のものとは異なる。例えば、彼らは動くものすべてが生きていると信じている。18ヶ月から36ヶ月の時期の子どもの世界は、出来事や物、考え

を理解するための、探索と質問、発見、意味の決定でいっぱいである。

能動的な人々との関わりや物を扱うことによって子どもが学ぶのだということであれば、ぬりえやワークシート、また粘土などの材料で模型を作ることのように、子どもに模倣を期待する活動は発達的に不適切である。

生後3年目は、排泄の訓練が、しばしば重要な問題になってくる。両親や保母は、子どもがこのセルフコントロールの新しい側面を学ぶのを援助する仕方について、その考えを一致させるべきである。保母が子どもに罰を与えたり恥ずかしめることは、一般に保育の場面では不適切でなじまない。排泄訓練は、子ども自身がそれを学びたいと感じたときに、唯一効果的に行うことができる。子どもが排泄の自立を達成するときには、共同の精神と意気込みが必要である。

＜社会的行為＞：1、2歳ころの子どもの社会的意識(social awareness)は、0歳児よりもかなり複雑である。それ以前の他者たちとのコミュニケーションの経験は、子どもたちと大人たちから発せられる合図を読みとる能力を洗練する。共感の感情は、他の人々も感情を持っていることが理解できるようになったときに開花し、ますます他の人々を模倣するようになる。

子どもの自尊心の最も重要な資源の一つは、愛する大人と継続的な関係を持つことにある。もし子どもが良きものとして評価されたなら、子どもは自分自身を大切にするようになる。この評価がやがて、肯定的な指導を子どもに受け入れさせることになる。もし大人が現実的な期待を持ち、はっきりとした一貫した意思を子どもに伝え続けるならば、この時期の子どもは、行為の「適切さ－不適切さ」の境界を学び、それを受け入れるようになるだろう。

この時期の子どもは大人の保護と指導に頼ってはいるが、自分が他者から独立しているという意識も示す。自分の独立性と有能さを感じる一方で、子どもは大人に依存していることも理解する。健康な幼児の精神世界は、相反する感情で満ちている。例えば、独立心と依存心、自尊心と恥ずかしさ、信頼と疑い、自己覚知(self-awareness)と混乱、不安感と全能感、敵意と熱烈な愛、怒りとやさしさ、そして自発性と受動性である。これらの感情の対立は、それを認識し情緒的安定をもたらすようなケアをしてくれる親たちや保母を必要とする。

この時期の健全な感情の発達は、自発性や、創造性、自律性、自己評価がサポートされ、まだ幼いということが受け入れられるような経験から生まれる。子どもは、独立し自信を持ちたいと思う反面、愛情と安心感に頼りたいとも思う。

1、2歳ころの子どもは、責任を持たされる機会や、重要な選択をするための機会、彼らの尊厳が損なわれないような方法でしつけられ要求される機会が必要である。子どもは、なぜ特定の振る舞いは制限されなければならないか（例えば、ルールは公平であり、大人の判断は正しいということ）を理解し始める。子どもが頼りにでき、子どもの言うことを理解してくれる大人たちによって、それらの制限が定められていることを、子どもが感じとる必要がある。そのような大人たちは、欲求不満や絶望感を抱いた子どもをサポートしてくれ、子どもの喜びと成功を一緒に喜んでくれる存在である。

自分の激しく敵対的な感情を相手に受け入れてもらえるような仕方で子どもが表現するには、指導が必要だ。もし1、2歳ころの子どもに対して、彼を理解し適切な計画を立ててくれるような大人の指導がなかったら、子どもは激しいストレスとコンフリクトを経験するだろう。大人の適切な援助がなければ、乳児たちの集団は子どもの発達がひどく損なわれる無秩序な環境になるだろう。

表3
<歩きはじめの子どもたちと2歳児（18カ月～3歳）>

他者への興味	自己覚知
・他者による評価と見られていることをますます意識するようになる。 ・他者たちを、直接の喜びの源泉だと考える。 ・他者たちが権利と特権を持つことを知り始める。 ・仲間との遊びや共同の探索から、たくさんの喜びを得る。 ・協力することの利益を知り始める。 ・同じ年齢、あるいは同性の子どもたちに、自己を同一視する。 ・他者たちの感情にもっと気づくようになる。 ・他者との関係での、自己調整と衝動のコントロールをますます示す。 ・小集団での活動を楽しむ。	・大人の要求に対して、「ノー」と言うように、個人としての強い自己感を表す。 ・力のある、可能性のある、創造的な行為者として、自己を経験する。全てのものを探索する。 ・自己評価できるようになる、そして自己に対する考えを持ち始める(良い、悪い、魅力のある、醜い)。 ・自己調整を試みる。 ・他者と自分の名前を使う。 ・6つあるいはそれ以上のからだの部分を同定する。
運動の目安と目と手の協応のスキル	**ことばの発達／コミュニケーション**
・マーカーあるいはクレヨンを使ってなぐり書きをする。 ・階段を上ったり下りたりする。1段の飛び降りができる。 ・ボールを蹴る。 ・1本足で立つ。 ・糸にビーズを通す。 ・円を描く。 ・つま先で立ったり、歩いたりする。 ・それぞれの階段を、交互に足をついて、昇る。 ・ハサミを使う。 ・クレヨンで線に沿ってひくのをまねる。	・目葉を結合する。 ・短い時間の間、物語を聞く。 ・話す語い数が200単語に達する。 ・目葉での想像を発達させる。ごっこ遊びをし始める。 ・たくさんの家庭用品の正確な使用を理解する。 ・複合文を使う。 ・形容詞と副詞を使う。一日の出来事を順序立てて話す。
身体的、空間的、時間的な覚知	**目的のある行為と道具の使用**
・2つの他のものと一緒にバッグの中に入れられた、自分のなじみ深い物を、手触りで同定できる。 ・"あした"、"きのう"を使う。 ・今いる子どもたちを見て、いない子が誰かがわかる。 ・独立性を主張する：「自分でする」。 ・帽子やスリッパのような服装品を自分で身につける。	・輪投げであそんでいるときは、穴のないものは無視する。他、あるいは穴のあいたものだけを投げる。 ・物をグループにして、分類したり名前をつけたり、分けたりする。(堅いと柔らかい、大きいと小さい)。 ・自分が物たり、殴いだりするのを手伝う。
感情の表現	
・攻撃的な感情と振る舞いをしばしば見せる。 ・対抗的な状態や気分の変化を示す。(頑固と素直) ・恐ろしさをますます示す。(暗闇、怪物などに対して)。 ・コントロールをますますきかせた感情を表す。 ・自分自身の感情や、他者の感情に気づく。 ・創造と製作に誇りを示す。 ・よりしばしば感情を言葉で表現する、象徴遊びの中で感情を表現する。 ・他者たちに関して感情移入を示す。	

(2)「発達的に適切な」乳児保育の基本原則

言葉を話す前や話し始めの時期は、子どもの行為の観察からと、その子と大人や他の子どもたちとの相互作用の観察から、「発達的に適切な」乳児保育のための情報が得られる。それに基づいて「大人がどのくらい子どもとうまくやっているか」、また「子どもが健康に育っているか」が評価(assessment)される。そのとき、その子を良く知っている大人たち（通常は両親）から得られる洞察や情報も合わせて利用される。

乳児に関する理論的、哲学的、実用的な一般的知識は、概念的な枠組みを提供する。しかしながら、子どもが健康的に発達するのを援助するような経験を評価し、計画し、提供するためには、一人ひとりの子どもを具体的に知り、理解することから始めなければならない。

生まれて2、3ヶ月の間は、乳児が安心と信頼の感覚を発達させるために、その子をサポートしてくれるような、思いやりがあり依存できるような大人との接触が重要である。発達初期にそこで得られた自信とコンピテンスの感情を利用して、這い這いをし始めた乳児は環境を活発に探索することができる。そのとき、すぐ利用できる安全基地の、愛する保育者のもとに安全に戻る機会も必要である。

1、2歳ころの安全や信頼を確立した子どもは、ますます自発的になり、創造的になり、集団に参加する準備も整い、個人としての自分を主張するようにもなる。以下に述べるような愛情のこもったまなざしが大人から与えられる雰囲気は、子どもが健康に発達するためにはとりわけ重要である。

1）忍耐強く、思いやりのある大人たち

発達的に適切な乳児保育で、忍耐強く思いやりのある大人たちの存在は、おそらく最も重要な要因である。生まれ落ちて以来、子どもたちは他者たちとの相互作用の中で積極的な役割を果たす。3歳以下の子どもをうまく保育する大人たちは、自分達の行為を、人や物に接近するときにその子が示すユニークなスタイルの方に合わせる。

<日課は教育課程である>：幼児の一日の時間を作ることは、きわめて重要である。新生児たちでさえ、遊びやおしめ交換のような毎日の日課の中で、自分たちの友だちとして誰かがそれを喜ん

でしているのかどうかを感じる。

乳児は清潔にすることや良いにおいがすることをあまり気にかけない。しかし彼らは気温や、手ざわり、位置、光景、音、においの変化を経験するとき、いろんな種類の感覚や社会的関わりから、それらを楽しみ学んでいる。なぜなら入浴は、大人の細やかな注意が必要とされ、何が起こり、いかに感じているかを乳児に話しかけるすばらしい機会である。乳児と一緒に楽しめる人は、入浴を全く自然でうちとけた仕方で何かを子どもが学ぶ機会にもできる。

＜他者との関わり＞：乳児が言葉でコミュニケーションができるようになるずっと前から、彼らは身体言語を理解する。愛情ある保育の継続性と一貫性は、子どもたちの発達にとって欠かすことができない。大人や他の子どもたちとの相互作用の経験を通して、乳児は自分自身について学び、他者とうまくやっていく仕方について学び始める。その子なりの感受性でその場にふさわしい言語的・非言語的コミュニケーションに参加するとき、共感やお互いを尊重し合うという乳児の感情が現れる。

民族的アイデンティティーの最も基本的な要素のいくらかは、3歳より以前に確立される。保母は、その子の家庭環境の文化的特徴やその雰囲気を知り、それをサポートしなければならない。親たちと保母たちが互いに尊重し頻繁に相談し合うならば、それは大いに子どもたちのためになる。

乳児は、周りの世界から直接学ぶ経験も必要だ(例えば、色や香り、音、味など)。子どもはかなりの時間を、一人であるいは2、3人の仲間と一緒に遊ぶ。子どもがどのように学ぶかを理解している大人たちは、子どもが自分から活動を始め、新しい状況を探索し、水遊びや絵の具で汚れるような遊びをしたり、音楽や言葉に応答するような、全ての経験から子どもが何かを得ていることがわかる。

例えば泣くことや、混乱すること、依存、わがまま、怒り、生殖器の違いについての好奇心などのような困った行為が、乳児の年齢相応の特徴だと理解できれば、大人たちは怒りや罰でこれらの行為を処理しないで、子どもたちの発達を援助できる。

乳児期の子どもの発達は全体的であり、社会的、情緒的、身体的、認知的領域に分けて考えることはできない。一人ひとりの子どもの発達には個々のパターンがあり、それぞれ独特の急激な変化と停滞、後退を表す。

2）身体的要求に対する応答

保護や快の歓び、また食べ物がどのように子どもに与えられるかは、子どもが自分の価値をどのように理解するかに影響する。もし子どもが自分の身体的要求に対してできるだけ迅速に愛情を持って大人が応えてくれると感じたら、その子は秩序ある世界を期待するようになり、セルフコントロールを発達させたいと感じるようになる。

事故は移動可能な乳児の大きな死亡原因なので、子どもの好奇心は抑圧されることなく、安全に調整されなければならない。室内や戸外の設備、おもちゃ、家具は子どもの安全を保証し、かつ子どもの探索欲求を引き起こすようデザインされ、子どもの活動は近くにいる大人に見守られている。

子どもはしだいに、何が安全で、何が危険か、それはなぜかを学ぶ。例えば揺れる板に乗って遊んでいる子は、近くに他の子がやってきたら、その子が指や足をけがしないように板を揺らすのをやめるだろう。もし万一けがしたとしても、癒してもらえることを子どもは知るようになる。また、安全を感じるときには自分自身を大切な存在だと感じるようになり、同じように、他の人々も大切だということがわかるようになる。

3）家族をサポートする保育所

親たちと保育所のスタッフとの間の、互いのサポートと良いコミュニケーションは不可欠である。乳児は、自分の環境がサポーティブで、秩序があり、予測可能かを学ぶ。保育課題やその子らしい行為、毎日の出来事についての頻繁な情報交換は、親たちと保母の間にサポート感を作り上げるのに役立つ。

親たちと保母が互いに競争し合い不快に思っていれば、乳児は不安を感じる。たいていの親たちは他人に自分の子を保育してもらうことに罪の意識や不安を抱いている。しかし子どもにとっては親たちが一番重要な存在であることをサポートしてやれば、親たちの不安はかなり低くなる。パートナーシップを発達させることによって、共通の

見方で子どもを理解できるようになる。親たちと保母が基本的価値観や子育ての実践を話し合うことは、特に重要である。そのようなコミュニケーションがなく、家庭と保育所で保育に大きな相違があれば、子どもは当惑し、混乱し、不安になるだろう。

大人たちが子どもに関する情報を共有すれば、一人ひとりの子どもの個性をより良く理解できるようになる。例えば、睡眠時間や離乳食の量、子どもの好きな遊びについての情報は、保育計画を立てるときに役立つ。

生後半年ころに初めて保母に乳児を預ける場合、その子が人見知りをするのは自然なことである。見知らぬ人への不安は、その子の感情的・知覚的・社会的発達のしるしである。親たちと保母はこれを予測し、直接の身体的接触よりは、その子の興味のあるおもちゃで注意を引くような仕方で、この難局を乗り越える。

続く数ヶ月で子どもは這い這いをし始め、さらに歩き始める。子どもはより探索活動をするようになり、自分なりの好みを示すようになる。子どもの好きなおもちゃや食べ物、活動はその子の誇りの源泉となるもので、親たちと保母にとっても関心のあることがらである。自分の獲得した新しいスキルがその子にとって重要な人々からも喜ばれているとその子が感じるとき、乳児は良く育つ。

この時期の乳児に与えられる活動上の制限は、家庭と保育所で合理的に一貫していなければならない。これらの制限については、合意形成が必要である。またどんな活動が家庭でできるのか、家庭で好まれる食べ物をどのようにして保育所で与えることができるのかについても、親たちと保母は話し合い、合意を形成することができる。

子どもたちが赤ん坊時代にしがみつきながらも、独立性を求めて格闘しているときには、安定した環境と理解ある大人たちを必要とする。そのとき子どもは、極端から極端へ素早く移行する感情をコントロールしようとしている。子どもは楽しくて面白い、しかし不安を伴うスキルの習得に励む。子ども自身のオーガナイズされた感じと安全を味わわせてくれるような習慣を身につけ、日課をこなす。

親たちと保母は、子どもの感情の爆発や大成功、努力など、その子の主要な出来事をしょっちゅう話し合うべきである。そうすれば、親たちと保母は、その子がその子らしさを表してくるとき、その子をサポートし、信頼できる環境を整えるための方法について合意できる。例えば、排泄訓練は、親たちと保母の間の最も重要な共同作業である。

②今井和子氏の保育実践

今井和子氏は、川崎市立宮崎保育園に保母として勤務していた保育実践家であり、研究者である。「子どもとことば研究会」の中心メンバーとして活躍しており、その実践は多くの実践家や研究者に評価されている。森上(1990)は次のように今井の実践を評価している。「自らの感性と子どもへの豊かなイマジネーションとで、保育の場で出会った子どもたちから、実にすばらしい探索行動の数々と、その意味を素手でつかみとって見せてくれる」。

今井は穴、棒、水、石のような具体物を利用した探索遊びに注目する。穴、棒、水、石ーそれらは遠い古代から今日にいたるまで、いつの時代も自然の中にあったものである。歩き始めた乳児のこれらを用いた探索遊びについて、今井（1990）の記述をもとに紹介しよう。

＜穴＞：幼児が、探索の第一歩で発見し、自ら働きかけることで、穴は穴としての姿、形、性質を子どもの前にさらけ出し、さらに穴の向こうの世界へと誘い込む。穴はまさに好奇心を呼びさますものである。“子ども性”(子どもらしさ＝Childlikeness）の一つに好奇心がまず挙げられるが、その好奇心の最初の誘惑者が、どこにでもある小さな「穴」ではないだろうか。穴は不思議な吸引力を持っていて、子どもの心を引き寄せ、穴の向こうの未知なる世界へとくぐり抜ける通路のように、心をはずませ期待で胸おどる闇のトンネルである。穴は「見る、のぞく」のほかに、ものを落とした音を聞くことなどで、その音を楽しむ快にも結びついている。

穴への探索の究極は、「穴をのぞく」から「穴にもぐり込む」である。子どもが「自分のここちよい居場所」として狭い穴にもぐり込む行為は、探索行動に出かけた旅人がくつろいでわらじをぬぐ借りの宿のようなものである。

1、2歳児が言葉を獲得することで、探索行動が質的に変化する筋道も、今井氏の実践研究では

具体的な子どもの姿としてとらえている。表4に穴おとし遊具で遊ぶ子どもの姿の発達的変化について示した。1歳6ケ月までの機能的探索遊びに比較して、1歳後半から2歳にかけては工夫や努力を伴う意図を持った遊び方になっているのが見てとれる。

表4　複雑な穴おとし遊具であそぶ子どもの姿と考察

10カ月～ 1歳6カ月まで	1歳6カ月～ 2歳半まで
・この遊具に使う玉を穴に落とすときは、A、M、Cま小さな穴に入れていることが多い。	・左に同じ
・E、Fのような大きな穴には、手をつっこんだり、そこに入りそうな様々な物を見つけてきて、穴をつまらせる。	・左に同じ ・入れた玉がすぐにとび出すH、Nのところから“どこから出でくるか”に関心をもっていくことが多かった。
・穴から玉を入れるだけで出てくることに、ほとんど気づかない。ころがり出た玉を見ても、自分の入れた玉であることであるにはほとんど気づかない。	・入れた玉を目で追えなくても、床にコロッと落ちる音で気づき、玉の行方を追うようになる子も多かった。
・透明パイプのGから入れてBから出てくることは確かめられている。	・Aから入れるとBから出てくるという関係がわかると、次に玉が出てくる前にうけとめようとするがなかなか取れない。すると保母や友だちに“ココ、イタヨ、トッテ”と玉を取らせたり容器を出口に置いて玉を受け取るなど自分のしようとすることに対して様々なくふうや努力をする。
・斜面Hをころがった玉がトンネル穴に入り見えなくなると、指をつっこんだりのぞいたりして玉を探す。玉のほうが早いのでなかなかわからない。	・繰り返しあそぶうちに、どの穴についても入り口ー出口の関係がわかり、出でくる玉を取ろうと運動を試み、達成する。 ・他のあそびにおいても、はじめと終わりを意識して表現する姿がめだってくる。

＜棒＞：「棒」もまた、探索行動には欠かせない。手で触れて探索する範囲は、歩行とともに急速に広がっていく。手の延長としての棒は、人類が握った最初の道具である棒と共通項であるように思われる。

幼児は、棒を持つことでえらくなったような気がしたり、棒でたたくことでものの性質を見きわめるという探索行動の道具として用いることが多いようである。

また、発達的に1、2歳児にとっての棒は、「体や心の一部、心を表現するもの」、2、3歳児にとっては「自分の要求に応答してくれる道具」であると棒の意味の変化を指摘している。

＜水＞：幼児の水あそびは、水の流れを手のひらに受ける水圧の快、冷たさの快、流れる連続の快、水しぶきの形を見る快、そこにある光の動きへの快など、具体例を挙げればきりがないほどである。自閉症児が、水道の蛇口をひねって水を出すことが好きだったり、ホースで水をだすことをあきずにやっているのも、言語を獲得する以前の1歳児と共通した五感を使っての快の楽しさを味わっているのかもしれない。

18ケ月から3歳児になると、子どもの探索活動は減少してくる。今井(1990)によると、その理由は下記の2つである。

第1は言語の発達である。言語が発達してきて探索活動のかわりに、子どもたちはさかんに質問をするようになる。行動することによって周囲の環境を自分に取り込み、内化させていた子どもたちが、だんだんと言語主導の生活に移っていくためである。

第2は探索活動がイメージを中心とした表現活動に変化していくためである。2歳頃までには身近かな大人の模倣をはじめ、ごっこ遊びへとつながっていく。3歳ころまでには、眼前に具体物がなくても自分のしたい物にみたてて遊ぶことができるようになる。空想を楽しむことができるようになる。これらはピアジェの提唱する前操作的思考の特徴である象徴的思考の現れである。

今井は探索活動で子どもたちが次のようなものを獲得すると述べている。自己概念の形成、豊かな感性、言葉の発達に重要な言語の発達。また、

今井は最近みられる探索活動をあまりしない子どもたちを分析して、その原因を次のように考えている。①移動遊びの喜びが持てない、②心身の安定が損なわれている、③言語の獲得が著しく早い、④大人の過干渉と過保護、⑤集団に適応させることを優先させる保育、である。⑤の原因は、日本の子供観や保育観を象徴しているようだ。「一人ひとりを大切にする保育」がスローガンとして掲げられても、日本社会の現状では子どもたちを集団に適応させることが最優先させる傾向が強い。危険の管理がしやすいということも大きな理由であろうが、探索活動を制限することによって先にあげた3つの獲得物が阻まれるとしたら、失うものが大きいと今井は問題提起している。

4．まとめ

探索活動が、乳児の認知発達においてもコンピテンスや自信などの獲得においても、重要であることが言及された。また、探索活動における大人の役割として最も重要なものとしてNAEYC と今井の主張を表5にまとめた。どちらにおいても「大人の過干渉や過保護はさけるべきだ」ということは一致している。今井の子どもの自由と探索活動を重視する保育実践は、日本の保育のなかではNAEYC の立場に近いことが伺われる。

日米の子育てに関する考え方は、両者の子ども観を比較することで明らかになる。米国ではプロテスタントの思想が根底にあり、その子ども観は「人間は生まれながらにして罪深い存在である」という一種の性悪説である。したがって、しつけ観は子どもの悪しき衝動を矯正するという色彩を帯びている。恒吉(1992)によれば「動物モデル」にのっとっているという。子どもの本性に矯正すべきわがままな衝動を持つ動物的存在を見るから、動物のしつけと似通ってくる。

一方日本では性善説の立場から自然に即した成長が子ども観の特徴である。恒吉は「植物モデル」になぞらえている。邪心がない子どもを軌道からずれたときに粘り強く方向を正すという日本人の伝統的発想は、わざと曲がろうとして変形してしまったわけではない植物に添木をするのと似ている。

これらの子ども観は対人関係のありかたにも影響する。米国では、しつける側の親の権威が認められており、西欧型の民主的で自由な社会を支え自己決定できる「個」が強調される。探索活動は、アメリカ社会で求められる、「個」として自由な主体を形成する活動として意味づけられる。そして乳児保育実践において探索活動の重要性を認識しながらも、それは決して子どもまかせに終始するのではなく、保母の指導性とオーガナイゼーションが強調され、活発な探索活動を促すものとして保母との暖かな関係が位置づけられる。他方、日本では、対人関係において自己主張するよりも、他者との共感性や思いやり、すなわち他人の気持ちを推し量れることが大切であると考えられる。この価値観が、「一人ひとりを大切にする保育」が保母の指導性を極端に控えさせたり、また「集団に適応させることを優先する保育」を支えてもいる。これが日本の保育実践で一人ひとりの子どもの探索活動を十分に保証することを阻んでいるのかもしれない。

表5　探索活動における大人の役割

・ＮＡＥＹＣが重要と考えるもの

①個々の子どものユニークなスタイルの行動に合わせた、忍耐強く、思いやりのある保育をする。

②探索するための時間を十分与え、変わらなければいけない重要なとき以外は干渉を避ける。関わりは、身体的または目と耳に接触による関わりをもつ。

③選択する自由を与える。

④子どもの行動が大人の期待にそえなくても、罰を与えたり、はずかしがらせることはせず、子どもたちを励まし援助する。

⑤愛情のある一貫した保育をする。

⑥子どもの日課、独特のふるまい、毎日の出来事についての情報についての情報を両親と保母は共有する。

・今井氏が重要と考えるもの

①大人の過保護・過干渉を避ける。

②共感的に親密な関わりをもつこと。

引用文献

東江平之・前原武子　1989　教育心理学－コンピテンスを育てる　福村出版

Brearley,M. & Hitchfield,E. 1969 *A Teacher's Guide to Reading Piajet.*(山内光哉 訳 1980 幼児教育教育のためのピアジェ入門　川島書店)

Bredekamp,S. 1986 *Developmentally Appropriate Practice.* National Association for the Education of Young Children, Washington, D.C.

Harlow,H,F. 1950 Learning and satiation of response in intrinsically motivated complex puzzle performance by monkeys. *J.comp. physiol.Psychol.*,43,289-294.

波多野誼余夫・稲垣佳世子　1974　発達と教育における内発的動機づけ　明治図書

Heron,W. 1957 The pathology of boredom. Scientific American. (In Readings from Scientific American.*Frontiers of psychological reseach.*Freeman 1966)

Hunt,J.McV.　中島　誠監訳　1990　子どもの知能はどのように育つか　新曜社

今井和子　1990　「自我の育ちと探索活動－3歳までのお遊びと保育－」　ひとなる書房

森上史朗　1990　子どもらしさの追求－探索活動の実践を読む－　今井和子　「自我の育ちと探索活動－3歳までのお遊びと保育－」ひとなる書房

Piajet,J. 1948 *The origins of intrlligence in children.* International Universities Press. (谷村　覚・浜田寿美男訳　1978　知能の誕生　ミネルヴァ書房)

恒吉僚子　1992　人間形成の日米比較：かくれたカリキュラム　中公新書

White,R. 1959 Motivation reconsidered:The concept of competence. *Psychological Review,* 66,297-333.